

「ぎりぎりの虹(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

この虹は夕方の生活時間帯に現れたので、翌日、多くの子どもたちが「先生、虹見たよ!」と言っていた。中には「すごく近くに見えたので、自転車でそこまで行こうとしたら、結構雨が降っててダメだった」と面白いことを言った子どももいた。

虹は、太陽・観測者・降雨帯という3つの位置関係で見える「大気光学現象」の一つである。観測者から見えた「虹の実体」が、実際のその場所に存在するわけではない。あえてその虹の場所に行けたとしても、単に雨が降っているだけだ。



私は虹を見逃した子どもにも、この虹を見せてあげようと、3年教室のテラスから撮影しておいた。雨上がりの芝生の校庭の向こうに架かる虹は、とても美しいと思った。写真を見て気づくことは、虹の内側は明るく(白っぽく)、主虹(明るい虹)と副虹(外側のおぼろげな虹)の間は暗いことだ。この暗い帯は「アレクサンダーの暗帯」と呼ばれている。これは雨粒に

よる「散乱光」が届かない領域が、主虹と副虹の間に集中していることが原因…というのが、私にもメカニズムがよくわからない。



多くの友人もこの虹を目撃していた。写真は山手線大塚駅北口で撮影されたものだ。構図に地上の建物などが入ると、「夕暮れの虹」という雰囲気がよく伝わってくる。



ふと虹の反対側をふり返ると、虹が教室の窓に反映していた。この虹を、この時間帯に、子どもたちと一緒に見られたら、どんなに楽しいだろうとも思った。降雨帯が少しずつ東に移動し、太陽光も減衰していったので、このあと虹は「音もなく」消えていった。